◆【コミュニティ・防災減災】分科会

◎発表団体

府県	市町村	発 表 タ イ ト ル	団 体 名
奈良県	生駒郡 平群町	協働ですすめる防災イベント「竹あかりの集い」 ～子どもたちを災害から守りたい～	竹あかりの集い実行委員会
大阪府	泉大津市	公園美化と地域づくり	NPO 法人緑化でまちづくりの会
兵庫県	加古川市	環境保全をはじめ、防災力を次世代につなげる地域づくり	養田まちづくり委員会
大阪府	大阪市	コミュニティ・コミュニケーションを築く ～出会いと学びと実践と“防災・減災”をとおして～	市民フォーラムおおさか実行委員会
兵庫県	宝塚市	花と緑の創出による地域コミュニティ	中山台コミュニティ緑化環境対策部

◎コメンテーター

田端 和彦 氏（兵庫大学生涯福祉学部教授）

[プロフィール]

兵庫大学生涯福祉学部社会福祉学科教授。

１９６４年三重県生まれ。

広島大学大学院生物圏科学研究科博士課程後期修了。

１９９３年に広島大学助手、１９９５年、兵庫大学講師、同大学経済情報学部経済情報学科准教授を経て、２００８年に生涯福祉学部発足により、現職。専門は地域経済学、地域政策論、地域福祉学。

２００７年まで兵庫県の外郭団体である（財）ひょうご震災記念２１世紀研究機構地域政策研究所で、主任研究員を務め、地域再生や競争力向上、コミュニティビジネス等に関する研究にあたった。

著書に『参画と協働－理論と実践』他、また論文に「地域の産業創発の国際比較」、「地域の競争力向上とガバナンスのあり方」等がある。

コミュニティ･防災減災分科会

自由討論･意見交換記録

はじめに

コメンテーター　田端氏

この分科会、タイトルは、コミュニティ、そして、防災、減災と、この二つのテーマが掲げられています。一見すると、なぜこの二つが一緒なのかと思われる方いるかもしれませんけども。この度の、3 月の震災にも明らかになりましたように、コミュニティがしっかりしているということの、防災上の重要性というところ、それが明らかになったというふうに思われたと。特に、このことは阪神淡路大震災でも言われました。たとえば、淡路島では、倒壊率が高いにも関わらず、亡くなった方の割合が、他の地域と比べて低かったという、こういう結果がございます。これは、倒壊した建物のどこに誰がいるかというのが、地域の人が知っていた。だから、すぐ救出ができた。コミュニティでの救出の活動が早かった。そういったことも言われております。今度の 3 月の震災では、救出というだけでなくて、サバイバルというか、生き残るといったらいいかもしれません。要するに、本当に公的な支援の手が入るまで、3 日間なり、それを生き抜けなければならないわけです。それはやはり、地域の力がなければ難しい。つまり、たとえば、津波で孤立してしまった地域。災害によって、交通復興が遮断されてしまった地域。残された地域のなかで、助け合いながら生き残らなければならない。これはやはり、コミュニティの力がなければ難しいということです。減災というのは、災害が起きたときに、その被害をできるだけ小さくするということです。その効果というのは、やはり、コミュニティの力というところに依存するのではないか、特に日常的なコミュニティ活動に依存するのではないか、ということが、皆さんも経験的には、お分かりだと思いますし、今度の震災の上でも、それが明らかになったということでございます。今日、お話しいただく、日ごろの活動が、いずれ、いざという時に、役に立つのではないかというような活動だけでなく、減災に役立つ活動も含まれております。これが、地域の力を強めることによって、今、政府のほうが、ハード面ソフト面での整備を進めておりますけども、そうした一つの要といいますか、鍵といいますのが、このコミュニティであろうというふうに思っております。

協働ですすめる防災イベント「竹あかりの集い」～子どもたちを災害から守りたい～

竹あかりの集い実行委員会 書記 窪井氏

Q：防災頭巾、一つ、コストはどれぐらいかかっているんですか？

A：材料費は、1 個 300 円でしたかね。実は、会員さんの、元の会長さんのおうちが布団屋さんでして、綿というものを、それから裏地ですかね。黄色いのを買うんですけども、裏地と綿を、ご寄付願いました。6 年間分。それなので、安くすんでいます。なので、黄色い頭巾のほうも、民間の団体から助成金をもらって、やっております。

Q：学校も公的な機関、民生委員も地域の推薦でなる機関でございますから、そういったものと、ボランティア団体とが連携するのは、やっぱり難しいというものなんですか。

A：たしかに難しいです。難しいんですけども、今回、私が学んだことは、いつも、総会の席でお願いします、お願いします、ご協力お願いしますって申し上げるんですが、さっぱり、やっていただけないということもあるんです。今回私達は、実際何か仕事してもらおうと思って、仕事作って、これをお願いしますと言った。たとえば、防災頭巾でもそうですよね。何か一緒にやっていきましょうじゃなくて、これを一緒にやっていきましょうって言われると、すぐ、ああ、そうですかって言ってくださる。

公園美化と地域づくり

ＮＰＯ法人緑化でまちづくりの会 代表 岡根氏

Q：NPO 法人化されていますけども、元々複数の団体が集まって協議会を作られている。法人化をされるときに、たとえば、その各団体の代表者がどういう役割をするかとか、そういうことは全部話し合いをされているのですか。

A：代表者が集まり、協議をやっております。代表者 13 名が理事をやっている。

Q：世話をする人もちゃんといらして、いいんですけども、先ほどおっしゃった犬の糞は、どういうふうに工夫されていますか。

Ａ：飼い主の意識を変えてもらわないと、文書を回すか、あるいは、そういう警告の看板を立てるか、そういうことぐらいしかないんやないかと思うんですよね。

Ｑ：NPO 法人化となると、何らかの収益、事業をするための資金が必要になってきます。これはやっぱり、会費のみでやっておられるんでしょうか。

Ａ：会費は、団体によって、取っているところと取ってないところがあって、ほとんど取ってないと思います。それで、助成金として、今まで金をもらっていたんですけど、これでほとんどが賄えるわけです。今回、行政のほうから、以前もらっていたところから、同じくらいの額は出しましょうかという話になっていますので、今後も、まあ、当分の間はいけるんじゃないかと思います。事業の枠を広げない限りは。

環境保全をはじめ、防災力を次世代につなげる地域づくり

養田まちづくり委員会　会長　小田氏

Ｑ：今後の検討で書いてあった、民生委員さんと協力して、その辺の情報を吸い上げていきたいということを検討されているのではないかと思ったんですけども、プライバシーの問題とか、いろんな問題で情報が取りにくい。その辺の、情報のもらい方とかいうので、具体的に検討されているようであれば教えていただきたい。

Ａ：要支援者の把握は、すでに、だいたい完成しているんですけども、特に独居の方。そこのあたりも民生委員と協力して、完璧にはいかないと思いますが、ある程度把握できている。

Ｑ：先ほど、起震車とありましたが、地震というのは、実際、ああいう震度でなかなか体験できないんですけれども、簡単に借りられるんですか。

Ａ：県の防災センターがあり、建物の破壊テストしたり、いろいろなことやっているんです。防災意識を持ってもらうためだと粘り強くお願いし、協力を願っております。

コミュニティ・コミュニケーションを築く～出会いと学びと実践と"防災・減災"をとおして～

市民フォーラムおおさか実行委員会　岡田氏

田端氏：先ほど、実行委員会のお話も出ましたけども、いわゆる組織のあり方のことについて、できれば聞きたいということでございます。岡根さんの団体では、集まりながら、NPO を作られており、今のところつながりとしてはチラシを年 4 回出されているということでした。先ほどちょっとあった、こういう緩やかな繋がりがヒントになる。

花と緑の創出による地域コミュニティ

中山台コミュニティ緑化環境対策部　部長　秦氏

Ｑ：持ち家が多く、こういう周辺環境をよくするということは、自分の持っている資産の価値を維持する、あるいは上げていくという効果があると。たとえばそういったところが、住民なんかの協力を得やすかった。なんか、そういうようなところというのはなかったでしょうか。

Ａ：一つの効果として非常に大きなところです。実際、若い人なんか来られる方、自治会参加される方見ると、非常に町並みがきれいだということで住む理由にしたという方もおられますし、それから、マンションの方でも、100 円出すっていう価値っていうのは、ニュータウンの住民としての一体感。この景色は桜台自治会のエリアですけど、でも、この桜も、マンションの人の桜。お金を 100 円出してるよ。そういう意味では、みんな、ニュータウン住民の気持ちを合わせるために、この活動というのをやってきた。

自由討議・意見交換

田端氏：今日、ご報告いただいた皆様方は、ある意味いろんな組織だったと思います。たとえば、小田様のところは自治会といいますか、支援型団体を中心とした組織でございました。それから、窪井様のところ、竹あかりの集い実行委員会様は、ある意味ボランティアを中心とする組織、そして、岡根様のところは、NPO なんですけども、様々な団体が集まっているプラットフォーム型の組織。同じようなところでいくと、市民フォーラムおおさかさんも、ある種、プラットフォーム型を志向されている。中山台コミュニティというのは、先ほどの養田まちづくり委員会と同じように、支援団体ということで、地域を支援してくださる。各団体それぞれ違いながらも、同じようなテーマを持ちながら、そして、私は何人かの人がおっしゃっていた「絆」という言葉、つまり、他の団体とどうつながっていくのか、どう結びついていくのか、というところに、この活動の広がりを、ヒントがあったかなというふうに思います。それぞれの組織

で違うんですけども、違う、他の組織とつながっていくつながり方といいますか、そこで何か、今回特徴があったように思います。ノウハウを含めて、先ほどこうやって巻き込んでいくんだという話しもあるかと。

Ａ：ボランティア団体 20 ぐらいあるんですけれども、日ごろはそれぞれ、手話のグループであったり、子育てのだったりするんです。だから、様々なんですけども、この竹あかりの集いっていうことに関しては、基本的には、日ごろ活動されてることを生かす場として参加しています。だから、コーラスをして、高齢者の施設に訪問するなんていう方達には、その会場でもアヴェマリアを歌っていただくとか、手話の会の方達には、手話でちょっと簡単なものを、助けてください、とかなんとかっていうことを教えていただくとか、そういうことで、一つの、やっぱり、テーマを持って、それを発表する場にするってことが大切だと思っています。

田端氏：養田まちづくり委員会は養田川の改修工事に携わって作られた組織が、防災の方向に変わってきたわけですけれども、その間に、たとえば、いろんな組織ともつながりながら、おそらく変化してきたと思う。その辺り、何か難しいことってありますか。

Ａ：以前から、年末のクリーン作戦は、ちょっと入れ替わっています。ちょうど 10 年ぐらい前に、防災訓練を加えていったんです。先ほど起震車とか、はしご車の話とか、行政に何か相談に行くと、まず、金がないと、これはどことも一緒やと思うんですけども、金がないんだったら知恵を出してくださいと言っても難しい。なら、一緒に知恵を出そうかというようなことで、今後、これからますますそういう時代になってくるんじゃないかなと思っています。災害があってはいけないが、いつ来るかも分からない。そのときには、悪い意味ではなしに、いい意味での、行政をうまく使って、仲良くやっていくというのが、得策じゃないかと思っています。

田端氏：ＮＰＯ法人緑化でまちづくりの会は、プラットフォーム型で、今のところは協働して行われるのは、このチラシづくりということですが、他にも、各団体のつながりを強化してますよみたいなところはございますか？

Ａ：市内であちこちに活動拠点がある。全部が全部、同じような仕事じゃなくって、たとえば、道路のアドプトロードみたいな格好でやっているところ、アドプトリバーでやっている、川のほうをやっているところもありますし。それで、6 つの団体です。市役所のすぐ横に東雲公園というのがあり、そこは、各団体から自分がそこに行って仕事してもいいよという人だけを集めて、そこで協働の作業をやっているわけです。今、応募しているのが 37 名おります。それで、月 1 回の仕事を、自分達の持ち場のほうもやって、なおかつ東雲公園もやっております。

田端氏：中山台のほうは、マンションの住民を巻き込むというのは、たぶん、意外と大きなテーマだと思うんです。特に都市の地域づくりのなかで。先ほど、この桜は自分達の桜だという意識を作らせたと。なかなか、これ、すごく立派なことだと思うんですけども、ここまで持っていくためには、何かやっぱり、仕組みだとか仕掛けといいますか、ご工夫があったと思うんですけども、もし、そういう、住民同士の絆という観点からお願いします。

Ａ：この緑化のほうに私、関わりましてから、7、8 年で、なんかこういう賞をもらったら、必ず行政とどっかで接点があるんです。作業するところは基本的には行政のところなんです。自分達のところではないんで、必ず行政のほうに断りを得るということで、必ず年間計画書を出します。1 年間の計画書を出しまして、だいたい作業というのは秋、下期にかかるんですけれども、まあ、そのときに事前に計画書を持っていって、一筆、どこでどういうような作業をしますというような計画書を出しまして、行政に了解を得まして、だいたい土日に作業しますので、日曜日に回収していただく。これが、一つのパターンになっておりますが、戸建ての方も集合住宅の方も、先ほど先生からありましたように、だいたい、その市内のなかのメインのところをきれいにするような形になっております。宝塚市の場合は、そういう公園緑地というようなところが窓口なんですけれども、他の、宝塚、割と山手のところ多ございまして。他の自治会なんかが、中山台のようにやってくれというようなことで、コラボかなんかする場合もあるんだそうですけれども。まあ、それは住民がしてるよということで、近所に来られた方が、お入りになられると聞いております。まあ、やはり、そこら辺は、行政とかなり協働するというのが、一番、共同作業する場合、一番大事じゃないかなと、こういうふうに思います。

田端氏：最後、そのコミュニティの、コミュニティコミュニケーションを築くというような、そういう観点で、防災減災をテーマにしながらされてきた。このあたり、今日のこの会議のこのフォーラムのこの部分が、一番中心となるテー

マを手がけていただいているわけなんですけれども。そうしたなかで、おっしゃっておりました、平時の取り組みが災害時の課題に応えるのに役立つと。これはすごく大事なところだと思うんですけれども、この点が、一つ、もし、もう少し突っ込んだことがあれば、いただきたい。これは、非常に長くお話になると思うんですが、ご経験からこういうことが大事じゃないかなみたいな。たとえば、この今日の、養田まちづくり委員会の話、事例でいうと、情報の問題出ましたね。情報の共有化が大事だとかなんかいうような、こういうテーマがあります。たとえば、そういうような形で、何かヒントになればというように考えますが、いかがでしょう。

Ａ：先ほどの要援護者支援もそうだと思うんですけれども、やはり、災害時に、とにかく要援護者とのつながりができるというよりも、日常から、たとえば、今、個人情報の関係で、なかなかこう、うまく行政からそういうのを聞き出せないと思うんですけれども、ただ、地域の現場って、本当に要援護者の方が、だいぶ情報をつかんでおられると思うので、たとえば、そういうのも、社会福祉協議会とか、そういう福祉的なところを中心に取り組みをするなかで、情報の蓄積をしていくことですとか。それが、コミュニティが災害時にも生きるやろうし、逆に今は、災害のために防災訓練をするために、そういう地域の高齢者の方、障害者の方の情報をみんなで共有しましょうね、となると、少し個人情報とは違う視点で進めやすいのかなと思ったりします。

田端氏：情報共有化っていう、せっかく団体が持っている情報を共有化していくのが一つの方法ではないか。まあ、先ほどお話がありましたように、プラットフォーム型というような形であります。ちょうどそういったものが一つのアイディアなのかもしれません。

Ａ：宝塚市で、災害時試験をやってみた経験ですが、最近、見守るということが、一体どういうことなのかっていうのが、まあ、定義がないなかで、なんとなく把握したいというだけ。いや、いや。見守るってどういうことなの、把握して何するのっていうそこら辺の論議が、宝塚のなかでもされてないまま、ただ、どこに誰がいるか、どんな人がいるか、それを把握したいって、それが先行しちゃってはいないかっていうような危惧がある。

Ａ：うちの町は小さいので、結構、みんな顔見知りが多いです。日ごろから、いろんな情報を、皆さん掴んでいるわけです。この災害時要援護者支援名簿も、台帳づくりも町では進んでいますが、この間、違う自治会の方からすごいお話を聞きました。そこは、古い自治会ではあるんですけども、私が援護必要な人だとします、そうすると、私に対して、この人とこの人とこの人とこの人は、いざというときにぴやっと助けに行くという役目を作っている。だから、私はあの人の係なのよねというふうに、日ごろから思っているという仕組みがあるというのを聞いて、大変これは素晴らしい、こう、お互い信頼し合ってるからこそできる仕組みだなと思っております。私も自分のところの自治会でしようかなと思っております。それがまあ、究極の助け合いになるかなと思いました。

田端氏：援護の話が出ました。情報の問題は、ちょっと難しいところはございます。個人情報保護法では、情報は提供者の承諾を得られれば、実は、共有ができるんですけども、なかなかこれが何十万件から取れないということがあって、だから、神戸市なんかは難しかった。あとは、先ほどおっしゃった、災害時の助け合い。こういうのは、確かに他にもいろいろやっておられると思います。こういった議論はやはり、コミュニティを中心としながらでないとできないというところは、今日の一つの結論になったかなというふうに思います。今日、これでだいたいもう時間が超過しておりますので、これで終わりなんですけれども、今日のこういう議論を地域に持ち帰っていただいて、いかにコミュニティを強化することが自分達のためになるんだという、そういったことの観点で、また地域で話し合いなりを続けていただいて、先ほど課題も出ましたように、情報の共有の問題ですとか、組織をどういうふうに運営してったらいいのかというような問題が出ましたので、そういったところの解決にあたっていただいて、成果が出ましたら、また、こういう機会にご報告いただければというふうに思っております。